

## ヨーゼフ・ロート 『ウクライナ・ロシア紀行』

(ヤン・ビュルガー [編], 長谷川圭 [訳], 日曜社, 2021年)

依 田 哲 朗

ヨーゼフ・ロートといえば、第一次大戦によって崩壊したオーストリア＝ハンガリー帝国を、文学作品内に蘇生させ、代表作『ラデツキー行進曲』(1932)の中で、老皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の崩御の場面を、敬愛の念、及び哀惜の情を込めて描いた「君主主義者」としてのイメージが強いのではないか。しかしながら、ロートには若かりし頃「赤いロート」を自称し、社会民主主義の機関誌『フォアヴェルツ』に、左翼主義的な記事を積極的に寄稿していた時期があったのだ。

本書には、フランクフルト新聞の特派員として、胸躍らせながら東欧に旅立った「赤いロート」が、各地の実情を目の当たりにし、高揚と失望を経験しながら、自身の思想を修正していく履歴が克明に記されている。モスクワにいたロートを訪ねたヴァルター・ベンヤミンによれば、「ロートは根っからのポリシェビキとしてロシアにやってきて、王政支持者として西に戻ってきた」ということだ。

ロートが失望したもの、それは「共産主義というイデオロギーの国家宗教」(本書101頁)に他ならない。彼は、政治・経済・技術の画期的な改革を、中世さながらの生活と衝突させ融合させるロシアの社会的実験室に、アナーキーな空間が生まれる大きな希望を見出していたが、実際には「検閲」がメディアを支配し、「イデオロギーに結びついた世界観」があちらこちらにはびこっていた。そんな状況を、ロートは次のように嘆いている。

「世界を知りたいのなら、山に登って一つの地点から見下ろすよりも、世界を歩きながら観察するほうがいい。なのにソビエト・ロシアの人々は世界の塔の上から眺める。マルクス、レーニン、ブハーリンの書物を積み上げてつくった塔の上から……」(本書106-107頁)。

本書を読めば、ロートがいかに国家的なイデオロギーを嫌悪した「アナーキスト」であったかが分かるであろう。だからこそ、ベンヤミンの物言いには疑問を挟まずにはいられない。アナーキーな思想を称賛し権威主義を嫌ったロートは、西に戻り、本当に「王政支持者」となったのだろうか。

近年、ロート研究では、これまでカノンとされてきた「在りし日の帝国へ回帰する」作家像を、修正する試みがなされている。長谷川圭によって翻訳された本書は、日本の読者に「ロートは、一体何者だったのか?」と、その再考を促す一助となるであろう。私たちはもう一度、ロート作品を、研究者たちが「書物を積み上げてつくった塔の上」からではなく、自分自身の目を頼りに判断すべきなのだ。